

町長

ひとりごと

(92)

齊藤

譲

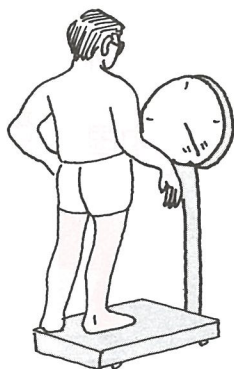


八月半のことである。東陽病院で人間ドックに入り、腹部のエコー検査を受けている時、医師が画像を見ながら、こう言った。「立派な脂肪肝ですね。一瞬、ドキッとした。実は、毎年一度検査を受け、その度に肝臓に脂肪が大部ついているから、食べ過ぎやアルコールには注意をするようにと指導を受けていた。当座はそれなりに気にとめて、無理に体を動かしたり、アルコールを控えたりしてみるのであるが、未だかつてそれが長続した例が無い。こんな程度の人間であるから、今度もまた多少の注意ぐらいはあるだろうと覚悟はしていたのであるが、検査の途中で、しかも立派など言われた時は、さては今まで注意を無視してきた

バチが当たって、いよいよわが肝臓も悪化してしまったのかと不安が走った。なにせ、腹を出して組板の鯉の如き状態に置かれた者にとって、検査器具を自在に操作する白衣の医師は、神様のように絶対であり、その発する一言は有無を言わせないほど重く感ずる。ふだん職場や家庭で、言いたい放題のことを口に出して空威張りしている私も、「ハア、そんなに立派ですか。などと、間の抜けた言葉返す始末で、何ともバツの悪い格好であった。▼総ての検査が終わった後で、新進気鋭の宇野医師から所見を聞いた。ていねいで、理路整然とした説明を聞いて、特別に心配するところはないとわかり、いささか安堵した。ただ、例の脂肪肝については、カロリーの摂り過ぎと運動不足に起因

するものであるから、この際体重を減らし、アルコールも出来るだけ控えるようにという指導をいただいた。宇野医師の話は、とても穏やかではあったがなになににせ先の立派なという一言が頭の隅にこびりついていたこともありかねない。説得力を感じた。今度こそは必ず実行しようと思心したところであるが、幸にして半月たった今も実践が続いている。しかし、いま心の奥底からは、「所詮、三日坊主の行先は分りきったことよ。」と悪魔がせせら笑

体重こぼれ話



う声が聞こえる。・・・南無三▼ところで、今まで私は「体重を減らせ」という指導に、ある戸惑いを感じていた。何となくかといえ、来し方五十年の人生の中で私は、常に「太りたい」という願望を抱き続けてきたからである。私は子供の頃から、骨に皮がついているといつても

い溜息をついていた。こんな状態は花の青春時代を迎えても一向に変わる気配もなく、貧相な背広姿、とりわけシャツ姿を鏡に写す度ごとに、暗いコンプレックスに身を沈めていた。ある時、職場の先輩に「どうしたら太れますかね」と尋ねたことがある。すると先輩は、「心配するなよ。もう少し歳をとったら、絶対に太ってくるよ。もし、早く太りたいのなら、ビールを飲み、脂身の肉を食べるようにしてみることだ。」とアドバイスしてくれた。半信半疑ではあったが、溺れる者藁をも掴む心境で、努めて脂っこいものを食べ、ビールや酒を飲み続けた。誓って言うが、私は決して若い頃は酒が好きではなかった。だが、そうしているうちにいつしか親から受継いだ血統に火がつき、とうとう「酒好き」の看板を上げてしまった。

頃には六〇キロを超え、四十代を迎えて七〇キロに近ずき、四十代半を過ぎる頃には一時八〇キロ近くにまで跳ね上った。吹けば飛ぶような将棋駒ではないが、ちよつと強い風が吹けば身の軽さを嘆いてきた私の念願が、遂に叶ったのである。まるで、金を持ったことのない人間が金を持った時の気持と同じように、体重計の針が上る度に、心が弾んだ。しかし、それは金の魅力に取り憑かれた人間が、心を失う如く、体重を増しながら、健康を損ねる危険な道を歩き続けようとしていたのである。この歳になるまで、これといった病氣も知らずに自らの健康に過信していた私に、人間ドックは警鐘を鳴らしてくれた。何事も、過ぎたるは及ばざるが如しである。今度こそ、医師の指導に従い贅肉を削って体重を減らし、その一方で心の目方は増していきたいと思っている。